

墓石に刻字された「<sup>うはつきゅう</sup>鳥八白」に係る一考察



(山形市上桜田の大沼 <sup>かおる</sup>香)

私の知人の佐々木さんから「鳥八白」に係る冊子（加藤和徳氏編著）を頂戴しました。一部抜粋したものを「別添-1」として添付します。その内容に触発されて別角度から私見を簡単に整理しました。一番関心のあることは、「墓石に刻字した『鳥八白』文字の意味する処」についてです。当該冊子別添-1の③頁・④頁にその説が記載されており、学問的・専門的な考え方はそちらに譲ります。その上で、浅才非学の私が直感で思ったことの羅列を以って以下のように纏めてみました。

.....

## 1. 背景

### (1) 往古からの日中文化融合

本件の根源は、古代中国思想、すなわち陰陽相対二元論、天神合一説、天地人合一説にあります。加えて孔孟や老子・列子などの諸子百家の思想が練り上げられて来ました。

他方、日本では、アミニズム信仰を基層とした天神地祇信仰が根付いていた中に儒教が伝来（513年）し、まもなく仏教が伝来（538年）し、それらの古代中国思想が取り入れられ、古事記（712年）・日本書紀（720年）の神話に展開されて日本固有の文化が醸成されて来ました。

### (2) 「鳥八白」の刻字が曹洞宗の墓に多い背景

別添-1の⑤頁にあるとおり、殆どが曹洞宗寺院の墓石に多いという理由について、私は次のように考えます。ここで、宗派を解説するものではありません。

結論的に言えば、禅(宗)の影響大であると思います。

曹洞宗は、中国の禅宗五家（曹洞、臨濟、潯仰、雲門、法眼）の1つで、日本仏教においては禅宗（曹洞宗・日本達磨宗・臨濟宗・黄檗宗・普化宗）の1つ、鎌倉仏教の一つであります。その曹洞禅は、「修証一如」といい、修行と悟りは同一のもので相即不離であると教えます。すなわち、陰陽合体、生死一如、心身不離、知行合一の思想です、陰陽のどちらかに偏在することを嫌う考え方です。遡れば、仏陀の教え（原始仏教）にあります。その禅宗の教えを噛み砕いて構図化すれば、次頁の図-1および図-2 abc のとおりです。

### (3) 禅の教えの一面

その1；この世のものは、本来、根源的に何もかも「一つに混融調和、すなわち全一化」しています。それを『無分別智』の世界といい、この世の真相なのです。陰陽が合体した陰でもない陽でもない、いわゆる「無色透明な全一の混沌世界」となります。なお、「陰と陽」に優劣なし、優勝劣敗の相なし、まったくの同相・同格です。他方、人間の認識作用に至る知恵として陰陽二元の芽（眼）が出ました。その構図は図-1中央部の「魚眼太極図」のとおりです。陰（黒）と陽（白）は、反発と吸引の両極を以って永久に闘ぎ合います、これを『分別知』の世界といい、これもまたこの世の真相なのです。

『無分別智』は仏陀の理想界、『分別知』を生身の人間界で、対立的に別ものと思いがちですが、現に人間を取り巻くこの世は、この両方世界が混在しております、よって、絶対に途絶えることのない陰陽の闘ぎあいが複雑な社会を生み、無智な人間は蒙昧するのです。それらに打ち勝つためには自身の

「心・言・行」――「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」について『全一化』を強く意識した態様に変えて行く――つまり、陰陽調和の世界を希求し実践して行く必要があるという訓えが禅です。

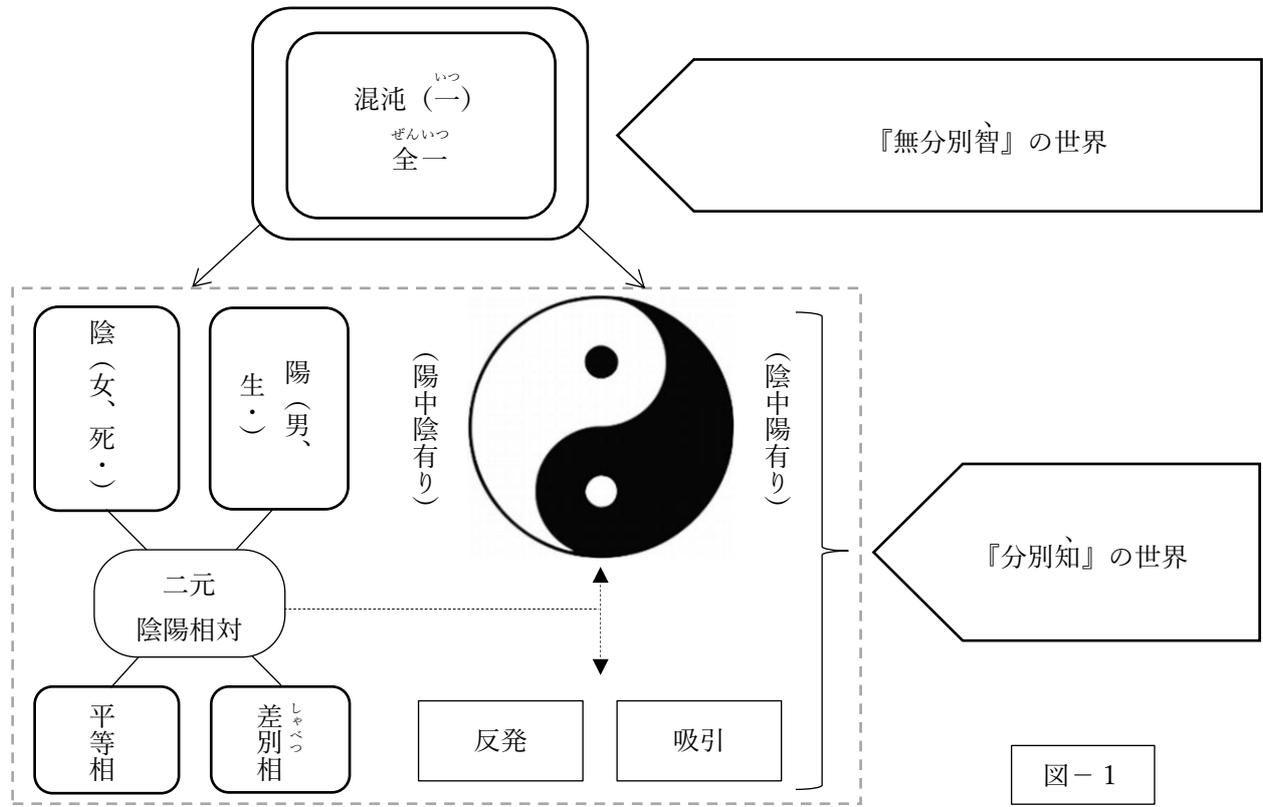


図-1

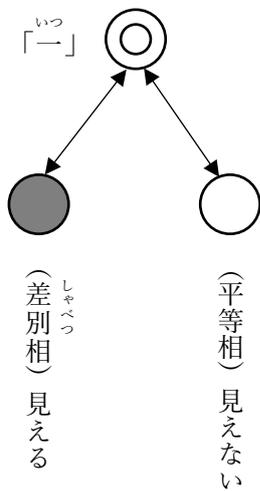


図-2a

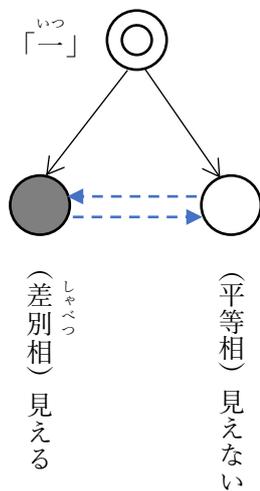


図-2b

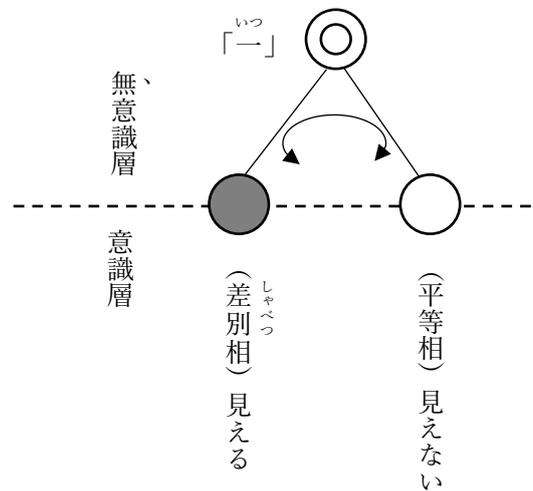


図-2c

その2；図-2a；生身の人間の認知機能は分別から始まることから、現実世界は見える差別相と見えない平等相があるかのように対立的に認識します。

図-2b；現実の現象界に生きる生身の人間であるが故に、差別相からは、平等相を<sup>シャベツ</sup>実態としては認識出来ないものの、至純・至高な平等相が隠れているのではないかという直感（智慧）は働きます。逆に、平等相にあっては、差別相を<sup>シャベツ</sup>実態としては認識出来ないものの、違いある個性を最大限尊重する差

別相が隠れているのではないかという直感（智慧）は働きます。

図-2c；そのような人間の心の認識という働きは、差別相から「一」に帰って（經由して）平等相に作用し、反対に平等相から「一」に帰って（經由して）差別相に作用するという往来運動をしているようなものです。それらを発展的に読むと、自身の喜怒哀楽等の付和雷同・揺れ動き定まらぬ心情に当たれば、あるいは集団において歓喜共鳴する同調行動などから想像し得る、思い当たる節があるというものです。他方で、「混沌（一）・全一」を通過することから、人生（対人関係）において、共有・共生・共感などの満足感や充実感を味わうことになります。

## 2. 「鳥八白」は「天地人」と「三世」の重層化、融合一体化

「鳥八白」の意味合いは、前記1.（1）（2）（3）三つの背景を底流に、空間軸「天地人」と時間軸「三世（過去・現在・未来）」の思想――共通キーワードは『3』――が重層化・複合化した中に込められているものと考え、次頁図(表)-3のように整理しました。

## 3. 墓石に刻字した理由（まとめ）

それら――図(表)-3の思想が凝縮収斂し全一化（合一）した結果を具象化しようとした、端的に換言すると「先祖との往来（会話・交流）出入口の印を考案した」ということです。平易には「亡くなった人・祖先に対する尊崇心（尊び崇める精神）の印」（呪術マーク）です、その心は、この墓の前に佇めば次のように双方向の交流が生まれるよ、ということです。

<下から上へ>

亡くなられた御魂よ、天地を自由に往来し、極楽浄土を十二分に楽しんでください、生前この世の娑婆では適えられなかった夢や希望は今やいつでも手に入れられるでしょう。今世の私達（子孫）は一時も貴方様を忘れず見守っていますよ！

<上から下へ>

その地球の平和と発展を、そして、生きとし生けるものの子孫繁栄と五穀豊穰を願いつつみんなを見守っているよ！ 苦難に直面した時は、ここに来て私を思い出してね、きっと勇気と知恵を与えようぞ、安心して下さいな！

.....

		生						
右各層の融合一体と生死の往来		(縦櫛三世)	過去 ☞	現在 ☞	未来 ☞			
		人	鳥	天空を羽ばたくここでいう『鳥』とは、この世での瑞鳥（目出度いことの前兆とされる鳥）を指し、あの世では天国の極楽（自由な世界）に住まう人を重ねたもの。 人の死の身柄は亡くなるが、あの世に逝ったその霊は生き続け、『鳥』のようになって自由に浮遊し続けるのだ。			差別相 <small>しゃべつ</small>	平等相
		地	八	天地宇宙の変化の道理を明らかにする（この世のあらゆる事象を陰陽原理の組み合わせで説く）易経の基本型は「八卦」、その『八（8）』は、陰陽2素の3乗だが、3は天地人3素の3、それぞれに陰陽作用⇒2（陰陽）×2（陰陽）×2（陰陽）=8 $\begin{bmatrix} \text{陰} \\ \text{陽} \end{bmatrix} \times (\text{天} \cdot \text{地} \cdot \text{人}) = 2^3 (\text{天地人}) = 8 = 八$				
		天	白	『白』は日（太陽）と月の象形文字を合体したもの、庚申塔の頭部には日（陽）・月（陰）の形象を刻字する。『日月』（昼を統べるものと夜を統べるもの）は天空の両眼を意味し、大宇宙のシンボルとする。			平等相	差別相 <small>しゃべつ</small>
		(横櫛三世)	前世 ☞	現世 ☞	来世 ☞			
		死						

図(表)－3

【 関 連 資 料 】

- 【 別添－1 】 加藤和徳氏著「山形県『鳥八白』墓石の研究」の抜粋
- 【 別添－2 】 平清水地区「清水山耕龍寺」境内の平清水家墓所内にある鳥八白の墓石
- 【 別添－3 】 「別添－1」中⑦頁～⑧頁（10.山形市上桜田・太子堂）の現地
- 【 別添－4 】 「千の風になって」の歌詞

(完)

【 別添－ 1 】

山形県「烏八臼」墓石の研究（加藤和徳氏編著）の抜粋

ページを振り直し、①から⑬まで再付定しています。

白鴿

白鴿

白鴿

白鴿

山形県「鳥人白」墓石の研究

—内陸の調査から—

加藤和徳 編著

私が、墓石の上部に「烏・八・臼―ウハツキユウ―」という辞書にもない合字に興味を抱いたのは半世紀に近い昭和四八年の春頃からである。当時、埼玉県入間東部(現、ふじみ野市・富士見市・三芳町)内に造立されている「烏八臼」墓石の悉皆調査であった。僅か一年と云う短期間であったが、各寺院や堂庵・共同墓地、さらには個人墓地まで限なく歩を運んだ。その結果八七基を探し出し「埼玉史談」<sup>(註)</sup>に発表する事が出来た。その後、上山市に移住しても続行、置賜と村山地域を主に調査を行っていたが、板碑や路傍に立つ庚申塔と云った石造物を探すのと勝手が違い、膨大な数の墓石を一基々に眼を透して探すのも根気が要求された。その蓄積の中で、一握りの数に過ぎないが、発見できた「烏八臼」の墓石を「西村山の歴史と文化Ⅳ」<sup>(註)</sup>に報告を試みた。しかし、県内では、「烏・八・臼―ウハツキユウ―」に関する研究は皆無で反響は無かった。それでも調査を内陸まで広げている最中に、市村幸夫(前・村山民俗学会事務局長)から最古銘の「烏八臼」と彫られた石祠の一報を頂戴した。それを「村山民俗」<sup>(註)</sup>の会報に投稿したことによって興味のあることを知った。

さらに、多くの方々に「烏八臼」と云う合字について知って貰おうと、平成二三年十一月に、白鷹フォーラムが上山市小穴地区公民館で開催された時に、「烏八臼について」研究発表を行った。聴衆者には、初めて聞く語彙ではあったと思うが、質問を受けたことによつて理解を深めていただいたと思つている。

以後、調査も進展し、これまでの報告より倍以上の基数が採集できた。それでも満足はし難いが、一応に年齢的な制限から調査を打ち止めとして、これまでの初出に加筆を加え、それらの墓石を下手な描き方で恐縮だが、将来の研究に用いられることを望んで試みる。

一 「鳥八白」の字義について

「鳥八白」の文字は墓石の頭部にほられた「鳥」と「八」と「白」を組み合わせた合字で、墓石や供養塔の頭部に刻す字であるが、一定していない。室町時代から江戸時代末期までの墓石に見られ、主に曹洞宗と浄土宗関係の寺院に多く、稀に時宗や天台宗にも造立されている。例外としては棟札にも墨書きされているものもある。

「鳥八白」の字義については、これまで確固たる定説はないが、古来より種々の仮説で示されているので、次に略記する。

- (1) 為の意。
- (2) 鳥を追う鵠(ゲキ・ゲイ)に似た水鳥の変化で、この鳥名を墓標に示すことによつて供物に近づく鳥を払う。
- (3) 日・月の合字。
- (4) 釈迦・弥陀・観音の合字。
- (5) 釈迦・文殊・普賢の合字。
- (6) 空の意。
- (7) 優婆塞・優婆夷の意。
- (8) 梵字を合字し崩したもの。
- (9) 咩(うん)の合字。
- (10) 大迦葉が成仏の印として、弟子に授けられた字形(註)。
- (11) 鶺鴒(かん・たん)と読み、鳥がものをついばむ意。(屍を林中に捨て鳥に齧わせ、空に帰するにより墓石の頭に用いた(註))。
- (12) 鳥八白のキユのキ、即ち帰とのキ八ウに白を加えてキ八、即ち帰空の意。

(13) 道家に伝える符号の類。

(14) 卍と同意義。

(15) 鳩の字は、鳥と八印と白(白)からなり(さらし首)とは木上に鳥をさらしたさま、八はむさつたさま、白は、窪んだ穴で、悪鳥の意、悪霊を穴に埋めて、上から八型におさえたことを表わそうとした呪文の字の意。

(16) 滅罪成仏の功德、吉祥成就の意を表す。

(17) 隠れキリシタン供養の意<sup>(註3)</sup>。等々の諸説はあるが、これと云った決定的な説とは言い難いようである。

しかし、この様な諸説をふまえて、「鳥八白」の研究者であった久保常晴は、次のような新説を提示されている。

『随求陀羅經優軌』破地獄呪云、俺佐羅野、努瑟鳩、布等訶。見依之則敢鳩一字不可限常此誦陀羅尼者、罪業悉消滅云々。の中にある意、シツタンの一字を二字に訳し、經中一字の功德を説けるが故に、遂に誤り、鳩の一字のみ使用するに至ったものであらうと説かれている。

正しくは『随求大自在陀羅尼神呪經』といわれ、その經文のことで、この陀羅尼は如来の分身の字であり、この字を書いて亡者に与えると、地獄に落ちても苦痛を受けず、安樂国に生まれ変わるといふ<sup>(註4)</sup>。

さらに、この經文の解説を、元奥羽大学教授の司東真雄は、陀羅尼を代表する梵字(種子)は最後の「努瑟鳩」、つまり、「ド・シユ・タン」という梵字で、この梵字でも經全体と同じ効果があるとされ、「ド・シユ・タン」の最期の字「鳩」を分析すると、即ち、刀白鳥の二字となり、更に刀を八に置きかえれば八白鳥となる。

ようするに、八白鳥とは「破地獄」、つまり、前説と重複するが、地獄に落ちても苦痛を受けず、安樂国に生まれ変わるよう……との願望を含めた呪(まじない)の記号であると結論つけている。(図1)

こうした「鳥八白」の成立の背景には、鎌倉時代の後期、曹洞宗に瑩山紹瑾が現われ、道元禅師の出家主義を排し、密教的要素を取り入れ、これによって一般民衆の中に融け込まんとしたものである。これが、室町時代後期には修禅加持の宗風にまで発展し、密教經典の「随求陀羅尼」の中に見られる一見神秘的な雰囲気を持つ「鳩」を見出し、庶民への伝道の具としたものとみられている。

## 二「鳥八臼」墓石の所在と宗派

### 1 所在と宗派

「鳥八臼」墓石の所在は、置賜地方に三ヶ所、村山地方に十二ヶ所、最上地方に一ヶ所で、現在までのところ十七ヶ所に造立されているが、庄内地方からは見られなかった。最も多く造立されているのは山形市内の二十基で、八ヶ所に分散しているが、最上地方には一ヶ所の共同墓地に十二基が密に造立されている。

また、造立されている宗派は曹洞宗で、稀に時宗と神社の境内にも造立されているが、神仏混淆時の名残であろう。その内容は次の通りである。

No.	所在地	宗派	基数
1	南陽市法師柳・楊林寺	曹洞宗	一
2	長井市歌丸・金鐘寺	曹洞宗	一
3	白鷹町荒砥・金鐘寺	曹洞宗	一
4	上山市菖蒲 共同墓地(久昌寺)	曹洞宗	一
5	山形市長谷堂・滝の山橋前	曹洞宗	二
6	山形市長谷堂・観音寺山	曹洞宗系	一
7	山形市谷柏・高瀬家墓地	曹洞宗	四
8	山形市長谷堂・清源寺	曹洞宗	四
9	山形市蔵王半郷・安養寺	曹洞宗	六
10	山形市上桜田・大師堂	曹洞宗	一
11	山形市七日町・光明寺	時宗	一

### 三「鳥八白」墓石の実例

〔置賜地域〕

#### 1 南陽市法師柳・楊林寺

法師柳一八六番地に建立されている曹洞宗の楊林寺は、元和元(一六一五)の創立。その墓地の一面に造立されている。形態は、安山岩を用いた箱型で、碑面の上部に鳥・八・白を組み合わせて彫られている。全国的に見ても最新に類する鳥八白の墓石である。(図1)

箱型・高さ四一cm・幅二二cm

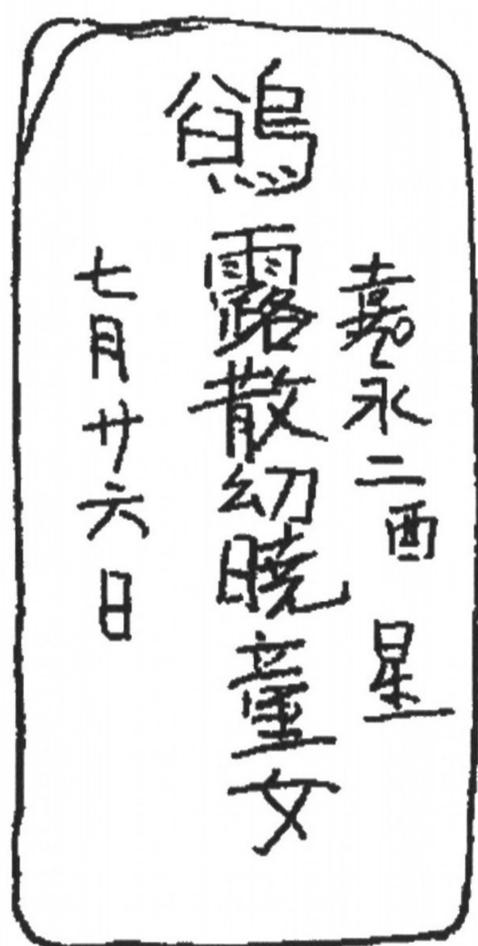


図1

#### 2 長井市歌丸字地籍二七・金鐘寺

地籍二七番地に建立されている金鐘寺は曹洞宗で、弘治元(一五五六)年に創立、天用梵鷲が開山とされる。その後、一時は衰退していたが、明暦二(一六五六)年頃より堂宇を盛んにした。天保五年に伽藍を焼失。更に、昭和十九年八月には隣家からの出火によつて類焼、寺宝や記録を失った。現在の本堂裏の墓地内には安山岩を用いた自然石の墓石には、鳥・八・白の三文字を組み合わせて刻しているが、「白」の字は「旧」を用いている。紀年銘は著しく摩滅してい

笠付型・高さ一五二cm

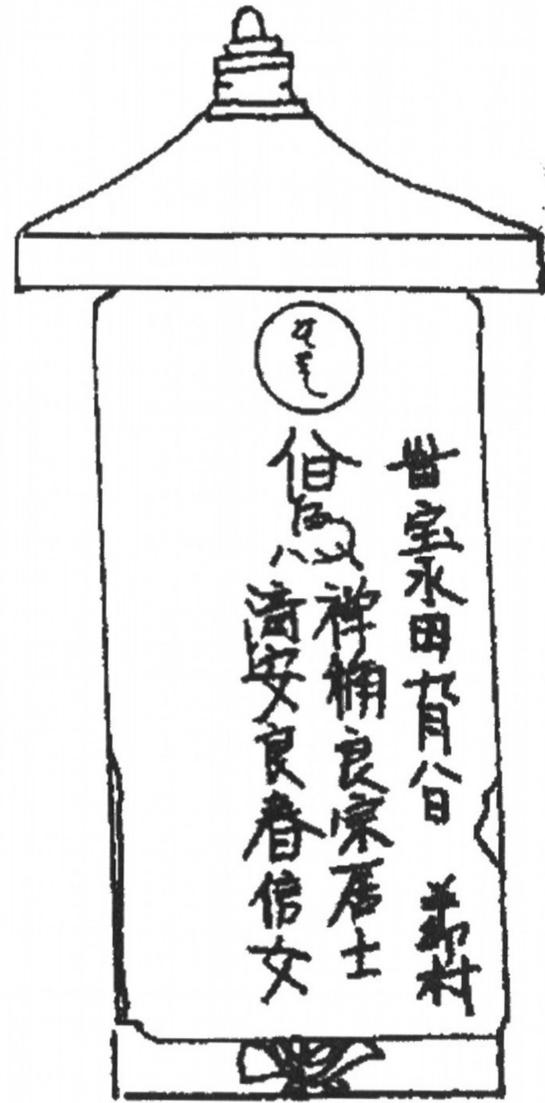


図 21

自然石・高さ五七cm・幅二八cm

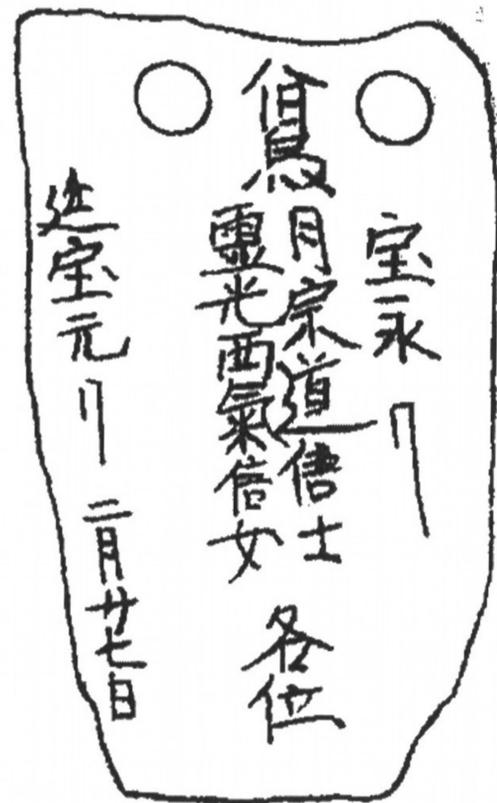


図 20

### 10. 山形市上桜田・大師堂

上桜田字新屋敷一五一番地辺に、船越家の個人墓地に大師堂が建立されている。その二画には、前村山民俗学会事務局の市村幸夫が発見した石祠「万年堂」が造立されている。中には変則的な宝篋印塔が安置され、その相輪の一部、九輪に「八・白・鳥」の合字が明確に刻されている。

万年堂と鳥八白について簡単に解説すると、万年堂は軟質な凝灰岩を用いた切妻造りで、上には大棟を乗せ、当時の作風であるが、基礎や母屋、宝篋印塔は破損が著しく、当時を真似て造り替えた堂であろう。また、刻してある銘文は「于時 元和八年壬戌ノ七月拾二日ノ鶴ノ三界唯一心ノ□□院」、元和八(一六二二)年の刻銘は、現存する県内の「鳥八白」は最古銘である。よって、貴重な史料として村山民俗学会会報第一七五号に「山形県内最古と最新の鳥八白」の表題で、平成十七年に投稿している(註)。 (図 22)

石祠・高さ五二cm

## 11. 山形市七日町・光明寺

七日町五丁目に建立されている時宗の古刹、光明寺は、永和元(一三七五年)の創立で、斯波兼頼の開基であると云う。その墓地の東側に「烏八臼」の墓石が造立されている。

頭部の山形は低い三角状であるが、向って左の山形は僅かに勾配を配しているので不対照である。額部は狭く施して大円鏡智を浅く陰刻、その下には合字を縦に「八・臼・烏」を組み合わせて刻している。(図23)

板碑型・高さ八十cm・上幅三十二cm・下幅二〇・五cm



図 22

## 四 鳥八白の文字配列

### 1 文字の形式

鳥八白(ウハツキユウ)とか、鳥八白(ウハツキユウ)と呼んでいる文字の合字と云うのか、形式について述べてみる。

これまで、鳥八白の合字についての報告は、多くの先人学者によって分類されているが、その形式は多種多様で、石塔の場合は石工の技能によつて定まつてはいない。これまでの報告では、普通、鳥・八・白の三文字で、その組み合わせは、偏と旁からなり、その何れかの八と白を重ねた「横型」と、冠と脚の間に一字を挟んだ「縦型」、冠の下に偏と旁の「縦横型」の三種類に大別できた。さらに、異体字として、鳥の「𠂇𠂇ひへん」を横並びにして八を「刀𠂇りつとうへん」・「𠂇𠂇つめかんむり」に、白を「旧」に宛てている。それらを含めて、最も多く形式の事例を採り上げているのが、鳥八白の研究者である関口 渉である(註)。それによると、

#### i 横型

鳥が旁(一例)・鳥が変化(十二例)・八が変化(三例)・白が変化(四例)・その他(二例)・鳥が偏(四例)

#### ii 縦型

八が冠(九例)・白が冠(二例)・鳥が冠(二例)

#### iii 縦横型

脚部の旁が鳥(六例)・脚部の偏が鳥(一例)・その他(一例)

以上の四七基を、関東地方を中心に悉皆調査の中から抽出したものである。

## 2 県内の形式

県内の墓石に刻まれた鳥八臼の形式は、横型・縦型・縦横型の三種類に大別できて、八と臼の文字には「ハ」・「刀」・「旧」を用いているが、(図45)の如く、九つの形式に分類できる。



図 45

註

(註1) 関口 渉『鳥八臼をたずねて』私版・平成二六年刊

(註2) 宮城県『宮城県史金石志』宮城県史刊行会・昭和三二年刊

(註3) 久保常晴『仏教考古学研究』ニュー・サイエンス社・昭和五二年刊

## 七 その他の調査記録

〔山形市東澤と滝山と大曾根地域〕

市村幸夫／佐々木幸男

加藤和徳氏の烏八臼の研究調査が一段落したのちに、以前から調査をしていた市村と佐々木の調査分を差加えてほしい旨お願いした結果、別項でまとめて欲しい旨申し出があり、ありがたく受け入れることにした。佐々木は地元東澤・滝山地区の石碑調査を精力的に進め、一貫して碑文を雪でなぞらえ読み取る手法を採ってきた。本項の報告はこの手法によるものである。市村は大曾根地区の滝平に焦点をさだめ、寶幢寺の古寺遺跡を探していた。その果実の一つとして烏八臼の調査があつた。

### 1 山形市若木・廣福寺

慶長十一丙午二月十八日 大宮氏

宗徳院永矛岩卓昌居士

慈光院玉嶺宗瑛大姉

元和九癸亥八月廿二日 主殿墓

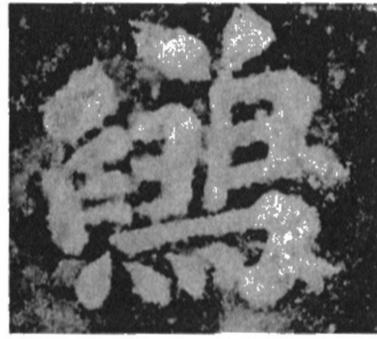


写真1

廣福寺は応永二年(一三九五)開山という曹洞宗の古刹。古碑「吉綱公碑文」がある。この墓は佐々木の調査。(写真1)母である慈光院の他界に際し、父である宗徳院の17回忌に合わせて元和9年に造立されたものであろう。大宮氏とは山形市村木沢出塩の大宮喜惣右衛門家。大宮家は、慶長5年の出羽関ヶ原の戦いで、直江兼続に敗れた畑谷

城主江口五兵衛の遺児が匿われたとの伝承があるという。この墓碑、残念ながら令和2年7月に改装され今は見ることができない。慶長の年号表示は県内の鳥人臼墓碑の最古のものであった。

2 山形市平清水・耕龍寺

元禄十丁丑年七月十六日 壽位  
歇山恵了居士

如意珠日

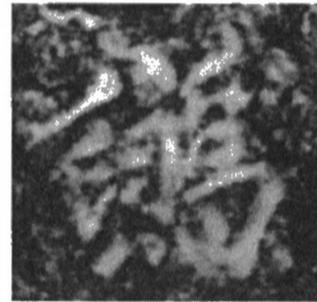
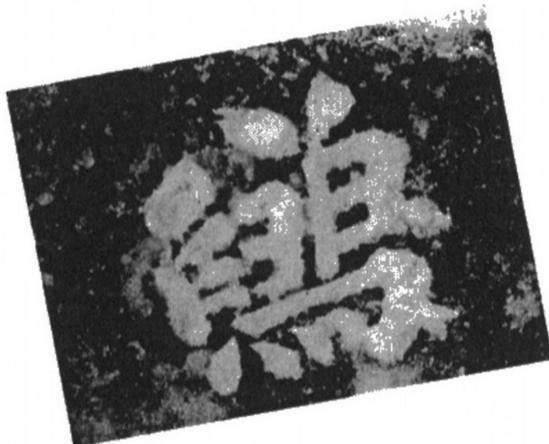


写真2

元禄十二己卯歳七月廿五日  
秋露幻香禅童子  
佐久間熊之助誌石 □第智喜立



写真3



鷺

鷺

鷺

鷺

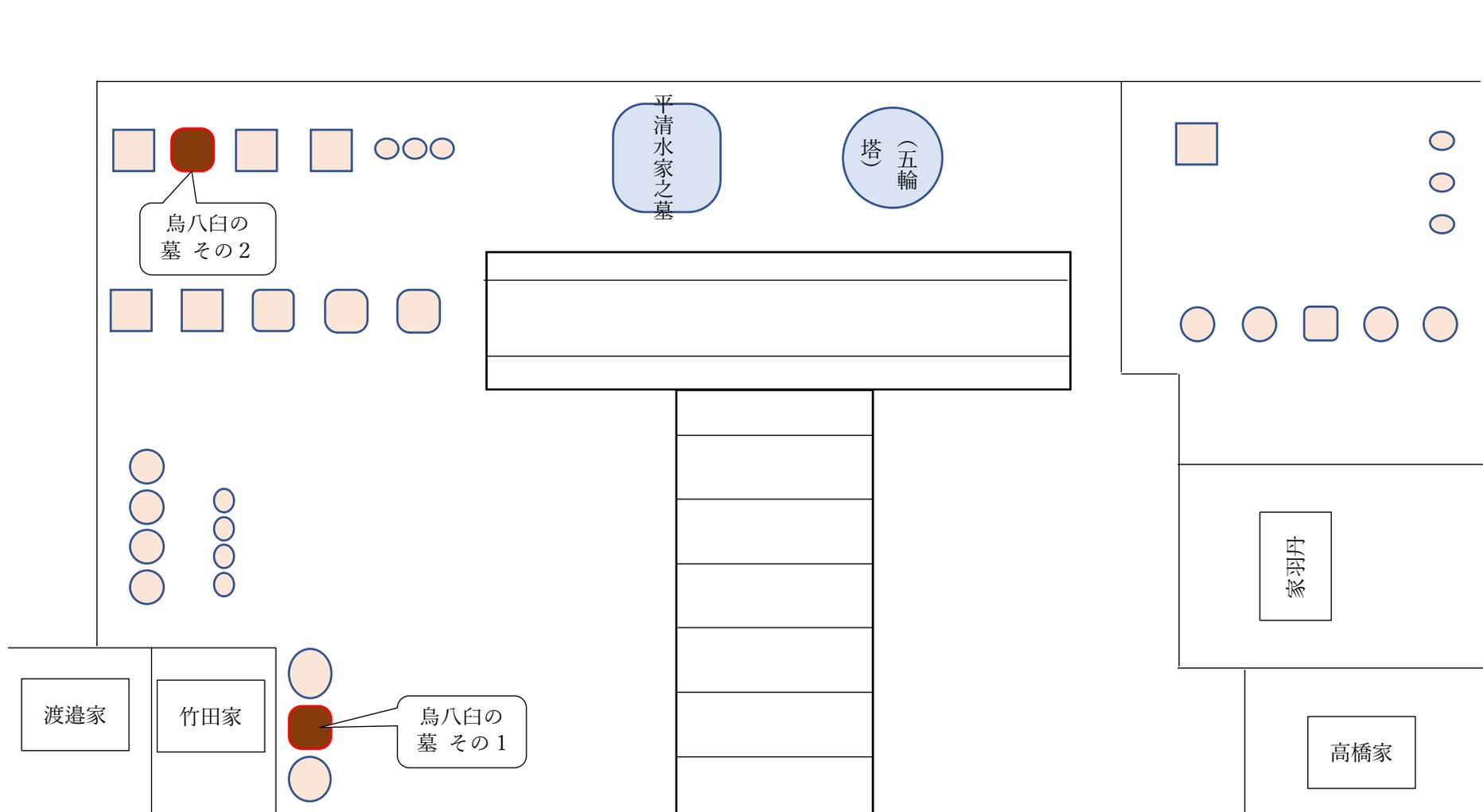


【 別添－ 2 】

平清水地区「清水山耕龍寺」境内の平清水家墓所内にある烏八臼の墓石  
(取り扱い注意)

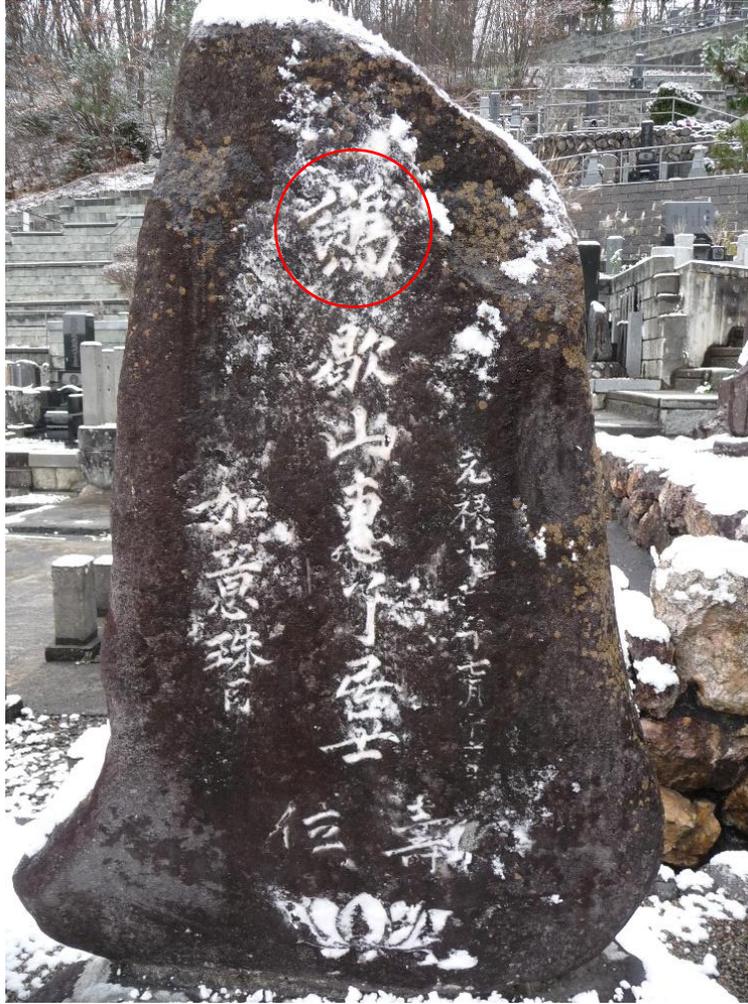


耕龍寺内平清水家墓所の平面概略図（秘密扱い）



その1

# 鴿<sup>ア</sup>



佐々木幸男氏撮影  
2016(H28)/01/15(金)



大沼香撮影  
2021(R3)/04/11(日)

(注) 後記7ページ「参考1」と照合すると、パターン<sup>ア</sup>と酷似しています。

その2

鴿

㊦



佐々木幸男氏撮影  
2016(H28)/01/15(金)

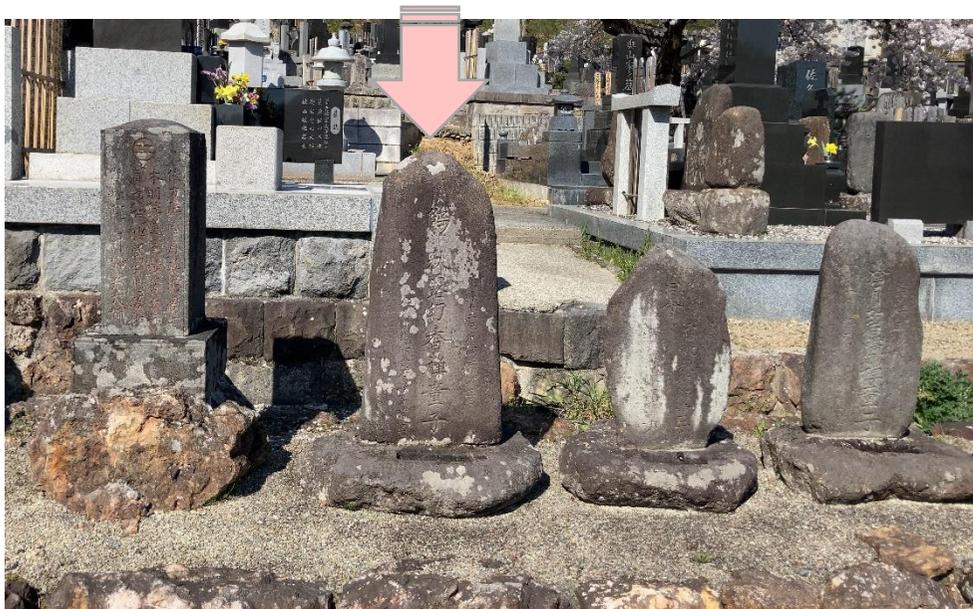


大沼香撮影  
2021(R3)/04/11(日)

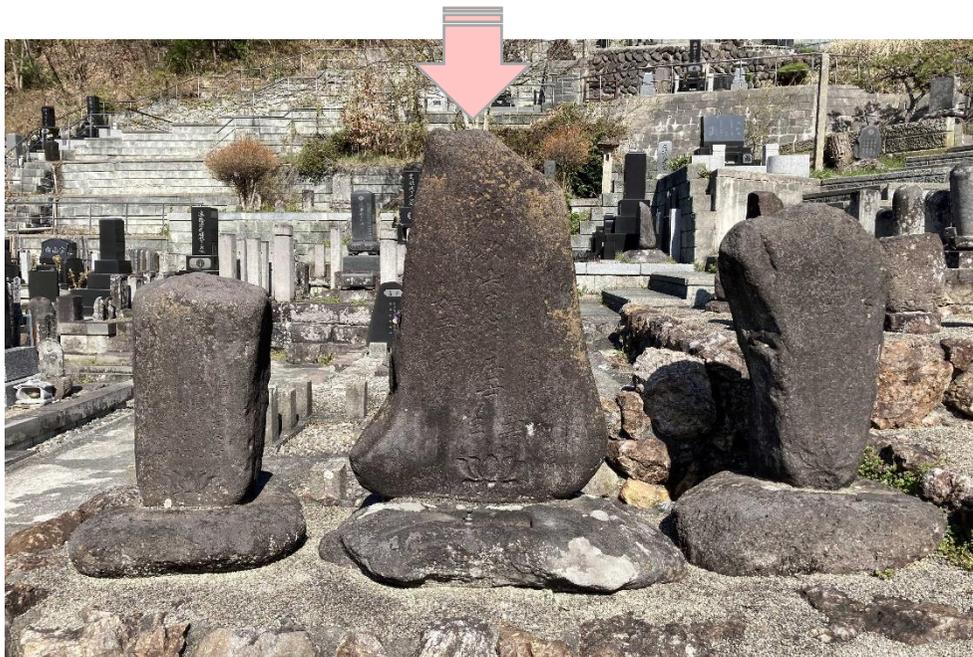
(注) 後記7ページ「参考Ⅱ1」と照合すると、パターン㊦と酷似しています。

耕龍寺内平清水家墓所の全景写真（秘密扱い）





平清水家墓所左奥の「烏八白の墓」 Ⅱ その2



平清水家墓所入口左の「烏八白の墓」 Ⅱ その1



平清水家墓所の正面中央奥

蓬萊波形山文庫叢書第十九集

㊦

㊧

㊨

㊩

㊪

山形県「鳥八白」墓石の研究

—内陸の調査から—

加藤和徳 編著

「鳥八白」文字の基本パターンについて、左図加藤さんのブックレットには、㊦から㊪までの4種類を記載していますが、最後の㊪については載っていないようなので、私があえて表に出してここに追加したパターンであります。  
現場の墓石に対する刻字においては、石工の作業過程のゆらぎで一部変形があるといわれています。

< 参 考 [2] >

○ 平清水家について

瀧山地区において、歴史的価値の文献としては最高権威を誇る「『瀧山の歴史』—2004（平成16）10月1日 同編集委員会編纂—」を参考に、平清水集落の起こりと平清水家について簡単に紹介して起きます。

1. 平清水集落の起こりには2説ある。

(1) 神亀年間（西暦724年3月3日～729年9月2日）の頃、黒金穆弥くろがねぼくやが朝命により下野しもつけの国から一族とともに下向し、千歳山の南麓に居を構え近郷の土地を開拓した。飲み水のないことを憂いて杖で地を穿ったところ忽然と清水が湧き出たので、この清水を「平清水」と称して、最上浦河古屋の里を改め、この地を「平清水」と改称した。

(2) 天保10(西暦1840)年に行基菩薩が新山の地に来て平泉寺を草創し、その後今の地に移転したが、新たに訪れた慈覚大師が仁寿二(852)年に再興した。そのおり、仏に供えるあかみず關伽水を求めて、錫杖で地を穿ったところ清水がこんこんと湧き出たことから平泉寺へいせんじの寺号の起こりとなっ

て、かつ、その平泉寺に由来して集落が「平清水」の名称になった。

2. 平清水家の起こり

『瀧山の歴史』には、59頁の終わりから64頁にわたって書かれているが、起こりのところに絞って記述する。

家祖は、前出の黒金穆弥くろがねぼくやとしている。その後、平清水・足利・佐久間の三系統を継承した。5代にわたり大庄屋を勤めた名家である。現当主は74(75?)代を数える旧家である。

=====

このような1300年近くにわたる平清水家の旧家の歴史に鑑みて、前記、「烏八白」の墓石が2基あるということは、頷ける感がします。

以上は2021(R3)年04月11(日)に一旦集約したものです。

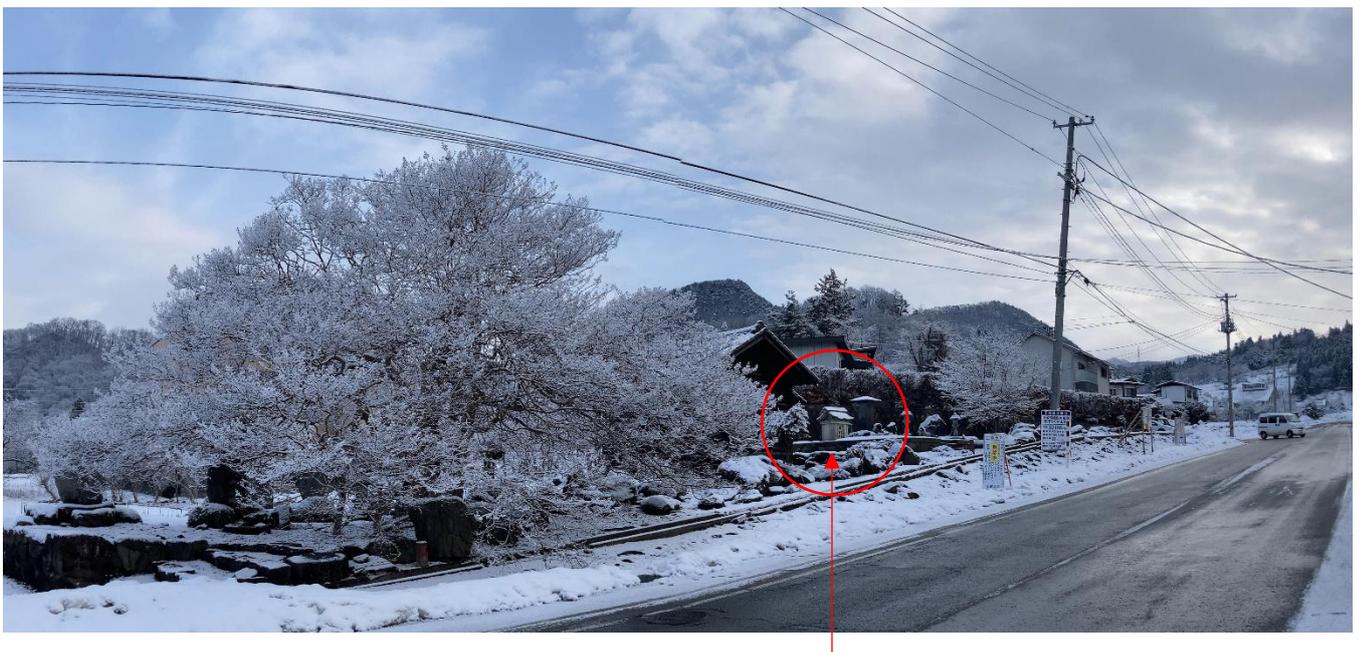
【 別添－ 3 】

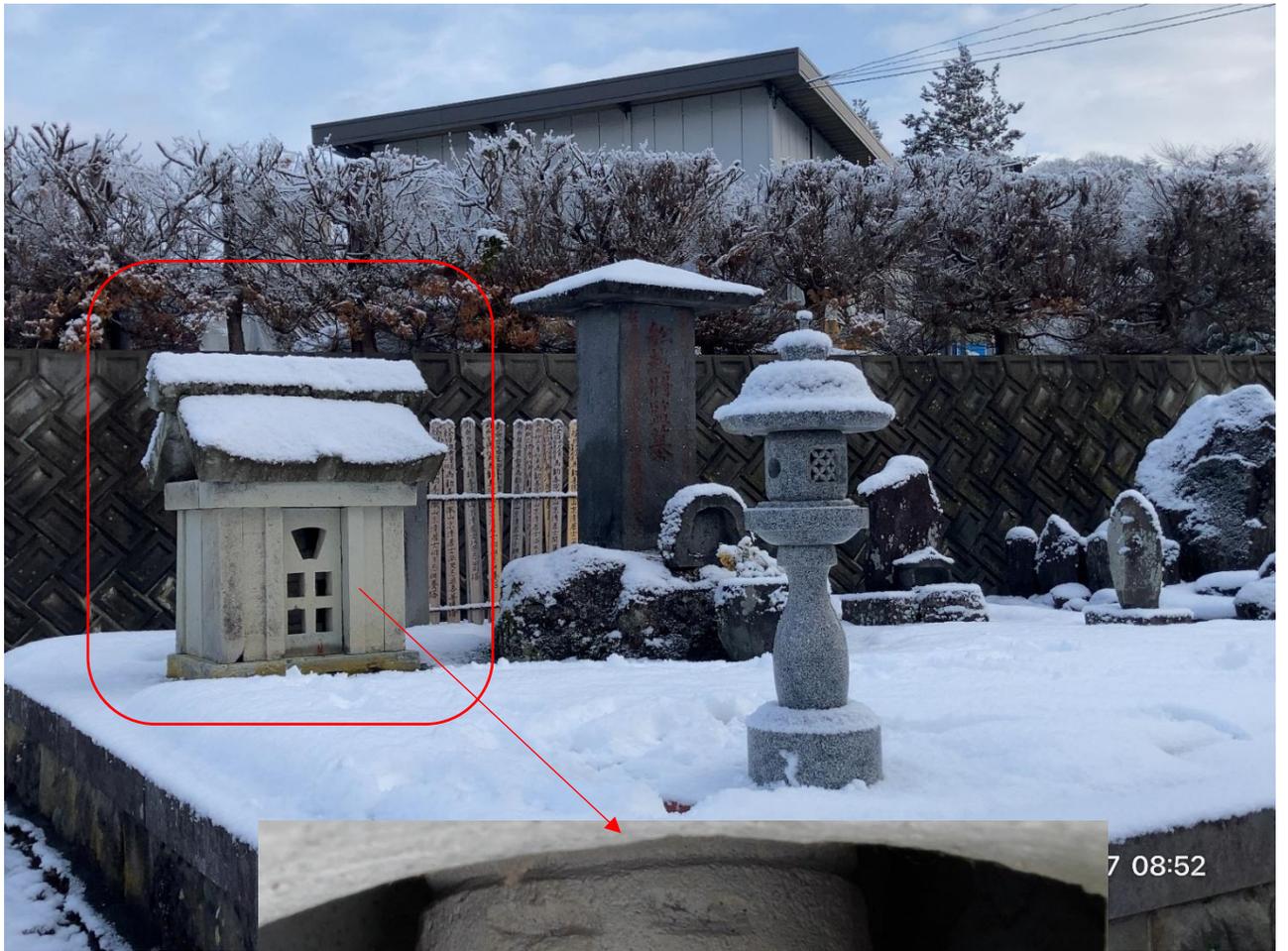
別添－ 1 中⑦ページの現地

別添－ 1 中⑦頁の「10.山形市上桜田・太子堂」の現地ですが、太子殿が正しい名称です。  
場所は下図のとおりです。ここは、昔、今の耕源寺があった所です。



以下に現地の写真を掲載します。





せきし  
石祠「万年塔」の中を覗くと右写真のとおりです。



【 別添 - 4 】

「千の風になって」の歌詞と楽譜

「<sup>うはつきゅう</sup>鳥八白」の心を現代風に見れば、「千の風になって」の歌の心に通じるものがあります。  
(日本語詞・作曲：新井 満、唄：新井 満／秋川雅史 他)

.....

私のお墓の前で 泣かないでください  
そこに私はいません  
眠ってなんかいません  
千の風に 千の風になって  
あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ  
冬はダイヤのように きらめく雪になる  
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる  
夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください  
そこに私はいません  
死んでなんかいません  
千の風に 千の風になって  
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風に 千の風になって  
あの大きな空を 吹きわたっています  
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風になって

a thousand winds

作曲 新井満 日本語詞 新井満 原作詞(英語)者不明

The musical score is written in 4/4 time. The lyrics are as follows:

1. わたし  
2. あきに

の おほかの ま えで なかないで ださ い  
は ひかりに な って はたけにふりそ く

そこに わたしは いません ねむ ってなん か いませ ん せんの  
ふゆは ダイヤの ように き らめくゆ きにな る あさは

か ぜ に せんの か ぜになっ て あ  
とりに なっ て あなた を めざめさせ る

の おおきな そ ろを ふきわたっ て いま す  
よるは ほしにな っ て あなたを み まも る

す あ の おおきな そ ろを ふきわたっ て いま す  
rit.....

(完)